

ヘミングウェイ

2023.6.8

6歳上の兄がいる。私が中学校に入ると、兄は東京の大学に行ってしまった。そこからは、一人っ子のようなものである。兄の部屋には、荷物だけが取り残された。兄の部屋に入ってみた。そこは、大人への入口のように思えた。

本棚に目がいった。そこには、高校生向けの参考書や問題集、そして小説などの文学書が並んでいた。「日本史」というタイトルが目飛び込んできた。手にとってみた。重い。読んでみると、歴史のことがよくわかった。おもしろい。中学校の歴史が、いかにあっさりしているかがよくわかった。それから、時折、その「日本史」のお世話になった。かといって、自分の部屋には、その本を持っていかなかった。兄の部屋で読むのがいいのである。

「国盗り物語」というハードカバーの本が気になった。司馬遼太郎の歴史小説である。戦国時代、一介の油売りから身を起し、美濃国の国主となった斎藤道三と、隣国の尾張国に生まれ、破天荒な政略・軍略で天下布武を押し進めた織田信長を扱った作品である。

ちょっとのつもりで読んでみた。すぐに虜になった。夢中で読んだ。分厚いはずなのに、一気に読んでしまった。おもしろい。実におもしろい。こうして、もともと歴史には興味はあったが、歴史好きの少年が出来上がっていった。

他にも「老人と海」を読んだことがある。アメリカの作家であるアーネスト・ヘミングウェイによる小説である。巨大な魚と老漁夫の死闘の物語である。誇り高い人間の栄光と悲劇を描いた名作である。これも、一気に読んだ覚えがある。おもしろいとは思ったが、今までに味わってきたおもしろさとは違うものを感得した。少し、大人になったような気がした。

先日、何気なくテレビを見ていたら、突然、ヘミングウェイの名言が出てきた。急いで、スマホで撮った。

人よりすぐれていることが立派なんじゃない。過去の自分よりすぐれていることが立派なんだ。

名言中の名言である。さて、自分はどうか。過去の自分と比べてどうかだろうか。すぐれている部分があれば、そうでない面があることも否定できない。なかなかむずかしいテーマである。だが、過去の自分を越える自分には魅力がありそうである。これならば、年齢を重ねた後でもチャレンジできる。

「日はまた昇る」「武器よさらば」も読んだ。兄は、ヘミングウェイが好きだったに違いない。私の読書生活の土台は、兄の部屋で培われたものにちがいない。